様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２２１

研究課題名（和文）本地垂迹の視点から見た慈円法楽歌についての基礎的考察

研究課題名（英文）Basic consideration of Jien's Devoted Waka Poems to God,focussing on Japanese idea Honji-Suijaku.

研究代表者
石川　一（ISHIKAWA, Hajime）

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：８０１９３２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、新古今歌人慈円の和歌活動を探求するために、その特徴の一つである法楽歌に焦点を絞り背景を為す彼の思想体系を検証するものである。家集内の百首歌序・跋に展開する宗教観・歴史観などを中心に、彼独自の思想体系解明してゆく。単なる伝本収集に留まるのではなく、周辺領域である仏教・神道の中世的実態というべき「本地垂迹」などに目配りを行う。
　特に伊勢に関する調査・分析として、国文学研究資料館所蔵『神宮典略』内の「神宮正権祢宜和歌」及び神宮文庫蔵『二十一代集抜萃』を検証することで、『御裳濯和歌集』の価値について考究を行った。その結果、「二見浦百首」作者の解明に繋がることになった。

研究成果の概要（英文）：This research narrows the focus on devoted Waka Poems that is one of the features to search for the activity of the Japanese Poet Jien verifies the thought system of man who does the background. It is clarified to 100 poems preface and epilogue centering on progressing religion outlook and historical view,etc. It keeps an eye on Japanese idea Honji-Suijaku that should be called the target realities in the Middle Ages of the Buddhism and Shintoism that doesn't stay in a mere information this collection but is the area in the surrounding. National Institute of Japanese Literature owning Jingu-Shogon-Negi Waka(神宮正権祢宜和歌) and Jingu-Bunko owning 21 Daishu-Bassui(二十一代集抜萃) was investigated by verifying it, as an investigation and an analysis cocerning Ise Shrine especially. As a result, it will cause the 100 poems-Futami-ga-ura(二見浦百首) author's clarification.

研究分野：中世和歌、特に慈円

キーワード：諸社法楽百首群　本地垂迹　御裳濯和歌集　神宮正権祢宜和歌　二十一代集抜萃　二見浦百首

１．研究開始当初の背景

新古今歌人慈円の和歌作品検証のためには、多面的な角度から分析しなければならないが、収録歌数六千首余りの和歌作品を扱うには様々な段階・手順の考究が必要となる。これまでの慈円研究者は伝本整理も中途半端で、周辺の歌人研究者は主観的な操作の上で都合の良い資料を取り上げることが多いので、反省すべきだろう。

（１）まず『拾玉集』の本文整定を行う必要がある。家集『拾玉集』伝本は３０余本現存しているが、それらを可能な限り博捜し収集した上で、その組織構成を検証することが必要となる。これについては、科研費（一班研究Ｃ)「拾玉集の諸本分析による本文整定」(課題番号：05610359）の作業で得られたことによって、ある程度の判断が可能の段階に達していることになる。

（２）拾玉集伝本の収集に併せて、慈円の詠歌時期（初学・実験・習熟・自省）を措定した上で、各時期の和歌分析などを行う。特に思想家としての内容を分析するには、自省期における「諸社法楽百首群」という作品が中心となる。

（３）この諸社法楽百首群という作品は、当然のことながら「寺社縁起」との関係が濃厚で、それらの検証なくして慈円和歌研究は成立し得ない。これまで諸社法楽百首群の各作品について、個別に寺社縁起の検証を重ね、日吉・北野・石清水・四天王寺聖霊院・賀茂・春日（二種）から成る諸社法楽百首群を考究分析してきたのである。

諸社法楽百首群は、その祭神によって形態を異にする。

①菅原道真を祭神とする北野社法楽百首は、白氏文集から題を選択する「文集百首」となっているが、藤原定家しか詠んでいない特異な内容となっている。

②不断念仏の道場であった石清水八幡宮法楽百首は、法華経廿八品から題を選択する「法華要文百首」となっている。

③伊勢内宮への法楽百首は、二十五首題を四季にそれぞれ詠じる「四季題百首」となっていると共に、藤原定家・藤原家隆などとの競作が見られる意味で貴重である。

④その他、平安京の総鎮守としての賀茂社法楽百首は生活営為を詠み込んだもの。藤原氏の氏神である春日社への法楽百首は名数百首。比叡山の守護神である日吉社への法楽百首は末尾に旋頭歌・長歌などの雑載が見られる。四天王寺聖霊院への法楽百首は「二諦（一如）」を綴るもの。

このように、自省期における諸社法楽百首群は形態を異にする諸社法楽百首群を個別に考究するために、その寺社縁起や詠作者慈円の思想体系を解明しなければならない。

（４）繰り返しになるが、この自省期における法楽歌の分析を推進してゆくためには、「寺社縁起」や「本地垂迹」に関わる側面に留意して法楽歌分析を進めなければならない。これについては科研費（基盤研究Ｃ)「寺社縁起形成を視点とした慈円法楽歌群についての基礎的研究」（課題番号：17520124）および同科研費「法楽歌による寺社縁起との相関関係に関する基礎的考察」（課題番号：21520199）などの研究成果によって、ある程度の資料解析の基本作業の一端が完了している。

こういう煩瑣な諸手続を経る分析考究によって、周辺研究者からの切なる要望に応えたいと思う。

２．研究の目的

家集『拾玉集』所収の諸社法楽百首は彼の詠歌時期のうち自省期に集中しているが、それらの百首歌にはおのおの序・跋があり、そこには法楽意図が端的に表出されているので、それを糸口として彼の思想体系を究明したい。

（１）甥良経や兄兼実が相継いで死去したので、九条家の後見役としての慈円の立場から「家」の意識を保持しなければならなくなっていた。その意味も相俟って、中宮立子腹の懐成親王（後の仲恭天皇）と九條頼経の将来を支える中心となる。そのことの思想的基盤として「二神約諾事」など摂関家の意義について言及する。

（２）現在の慈円研究は仏教・神道、さらに日本思想史の研究者が積極的に言及しているので、これらの研究成果を視野に入れながら、諸社法楽百首群の序・跋の分析に専念し、「本地垂迹」「狂言綺語観」「和歌陀羅尼説」などの歴史的系譜を辿らなくてはならない。それには寺社縁起に関係した彼の思想体系への視点を加味しなくてはならない。

（３）その寺社縁起についての考究は各寺社の縁起を読み解くだけでなく、それぞれの寺社との関係性についても目配りしなくてはならない。特に当時の文化思潮である「本地垂迹」と深く関わっていることは言うまでもない。そのためには、周辺領域である仏教・神道の中世的実態と言うべき「本地垂迹」「二諦一如」などに関する法楽歌、特に寺社縁起の根幹を成す伊勢神宮に関係する法楽歌の博捜・分析に全力を上げる。何においても「伊勢」を中心に分析考究を続けなくてはならないことが判明する。

３．研究の方法

一般的に寺社所蔵の貴重文献（内典）は写真頒布が許可されないことが多く、また手作業で調査した上でパソコンなどに入力せざるを得ないので、かなりの労力を要する。

（１）特に「伊勢」に関する分析の根幹をなす『御裳濯和歌集』という作品に着目し、その所収歌について分析した上で、個別に校注を施す。五百首足らずの歌数ではあるが、これまで校注などが全く存在しない歌人の詠

作が多いので、慎重に作業を進める。
（２）『御裳濯和歌集』作者についてその根拠とされる『神宮典略』内に所収されている「神宮正権祢宜和歌」という作品の分析を始める。この作品冒頭に「作者一覧」があり、簡単な注が施されているが、その考証に全力を挙げる。
（３）これまで神宮叢書『神宮典略』の底本に用いられた内務省神社局本の所在が分からなかったが、ようやく国文学研究資料館史料館に所蔵されていることが判明した。その底本確認・翻刻を進めることにより、どうやらこの作品表記は根拠となり得ないことが判明することになる。
（４）それを承けて「神宮正権祢宜和歌」中の『二十一代集抜萃　伊勢神宮作者』という神宮文庫蔵の小品を発見するに至ったので、併せてその内容解明を行う。「神宮正権祢宜和歌」との関係を明確にすると共に、「神宮正権祢宜和歌」を分析することで、『御裳濯和歌集』内容の究明及び、「二見浦百首」作者を確定することに言及するが、これは新見と思われる。

４．研究成果

中間的成果として、慈円の法楽歌作品についての既発表原稿だけでなく書き下ろしを中心として、『慈円法楽和歌論考』（勉誠出版・2015）を刊行することが出来た。この著書によって、慈円の法楽歌をより一層の内容究明を進展させ、歌人としての慈円という存在の偉大さを確認することになろう。併せてその一般的読者は慈円の法楽歌全容を知ることが叶ったことになる。

今後は、特に伊勢神宮関係の資料を中心に、彼の思想体系の根幹を成すものの考察を進め、さらに充実させる著書の刊行を予定している。

本文篇として、天理図書館蔵『御裳濯和歌集』翻刻・注釈（新たに書き下し）、国文学研究資料館史料館蔵『神宮正権祢宜和歌』翻刻、神宮文庫蔵『二十一代集抜萃』翻刻を配する。

研究篇にその各解題・関係性研究などを盛り込んだ『御裳濯和歌集の研究　翻刻・注釈・研究篇』の刊行を予定している。この著書により、種々の「伊勢」に関する事実が得られたが、思い掛けなく「二見浦百首」作者についても新見を提示出来ると思われる。正に周辺研究者の要望に応えることになると確信している。

今後の課題として、「二諦一如」に関する論の精査が新たなものとして確認できた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 石川一、林良齋をめぐる文雅の交流、多度津文化財保存会報、査読無、19、2017、1―7
② 石川一、文集百首に見る慈円の詠歌態度、新釈漢文大系『白氏文集』季報、査読無、118、2016、1・2
③ 石川一、伊勢と和歌―『御裳濯和歌集』などを中心に、奈良大学大学院研究年報、査読無、21 号、2016、1―15
④ 石川一、神宮文庫蔵『二十一代集抜粋』検証―附.翻刻、奈良大学紀要、査読無、44 号、2016、21―38
⑤ 石川一、慈円『文集百首』考―新古今時代の白詩享受の一側面、白居易年報、査読有、16 号、2015、205―223
⑥ 石川一、『神宮正権祢宜和歌』検証―附.翻刻、奈良大学紀要、査読無、43 号、2015、192―226
⑦ 石川一、「法滅」からの再生―東大寺再建における西行を中心に、龍谷大学仏教文化研究所年報、査読有、52 集、2014、254―275
⑧ 石川一、西行周辺の人物考証―「二見浦百首」作者のこと、仏教文学、査読有、39 号、2014、58―73
⑨ 石川一、『御裳濯和歌集』校注（Ⅱ）、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、９号、2014、1―37
⑩ 石川一、「二見浦百首」作者考証―藤原長方及び作者構成をめぐって、日本文学、査読有、2014・11 月号、2014、94・95
⑪ 石川一、『御裳濯和歌集』校注（Ⅰ）、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、８号、2013、173―218
⑫ 石川一、西行『諸社十二巻自歌合』の考察―『伊勢瀧原社十七番歌合』所収歌の分析を通して、国語国文、査読有、82 巻 11 号、2013、1―14

〔学会発表〕（計８件）

① 石川一、浮世絵と和歌との関係について、クラクフ国立博物館「女」展講演、2017・3 月、クラクフ市（ポーランド）
② 石川一、山本章博、平田英夫、西山美香、「法楽」の宗教空間、名古屋大学文学研究科シンポジウム「法楽をどう考えるか」、2016・11 月、名古屋大学（愛知県・名古屋市）
③ 石川一、神宮文庫蔵『二十一代集抜粋』の価値―『神宮正権祢宜和歌』などとの関係を中心に、和歌文学会 118 回関西例会、2015・7 月、奈良女子大学（奈良県・奈良市）
④ 石川一、和歌とは何か、世新大学講演、2014・11 月、台北市（台湾）
⑤ 石川一、伊勢の和歌―「御裳濯和歌集」を中心に、和歌文学会大会講演、2014・10 月、青山学院大学（東京都）

⑥ 石川一、西行周辺の人物考証－「二見浦百首」作者のこと、仏教文学会大会、2013・9月、東洋大学（東京都）
⑦ 石川一、「法滅」からの再生－東大寺再建における西行を中心に、龍谷大学仏教文化研究所講演、2013・7月、龍谷大学（京都府・京都市）
⑧ 石川一、『西行諸社十二巻自歌合についての考察－『伊勢瀧原社十七番歌合』所収歌の分析を通して、和歌文学会 111 回関西例会、2013・4月、龍谷大学（京都府・京都市）

〔図書〕（計１件）
① 石川一、勉誠出版、『慈円法楽和歌論考』、2015、548

６．研究組織
(1)研究代表者
石川　一　（ISHIKAWA,Hajime）
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：８０１９３２８３